

## 連携ビジョン

水戸のまちなかの連携の理想は、多様な主体や取り組みが、それぞれの違いを力に変えながら、回遊にぎわい、居心地のよい日常をまちなか全体で育てていくことで、「混ざって育つ、水戸のまちなか」を目指します。

未来ビジョンに対して、各主体が自身の事業理念や目的を軸に再解釈し、「自分ごと」として関与できる状況をつくるのが重要です。

連携の軸となるビジョンを「自分ごと」として共有

### 未来ビジョン コンセプト 挑戦心を育む、コンパクトなまちなか暮らしを取り戻す

- ・共通のビジョンの下、相互に連携し、事業を推進。
- ・必要に応じて多様な主体を巻き込みながら、連携の輪を広げ、効果的な連携で事業の質を高める。

ビジョンの共有

#### まちなか全体での大きな連携を実現

- ・協議会は、国・県・市などの「官」と、学識経験者や専門家、商店会、企業、公共交通事業者、都市再生推進法人をはじめとする「民」によって構成されているエリアプラットフォーム。まずは、構成員が「自分ごと」として主体的に関与し、事業の質を高めていくことが重要。
- ・構成員同士の連携をはじめ、各構成員のネットワークを活かし、まちなかやその関係者との連携を生み、より大きな連携を実現していく。

協議会を核とした連携

ウォークアブル化による連携促進

混ざって育つ、水戸のまちなか

#### まちをつなぐ道路空間の快適性・利便性を確保

- ・協議会の未来ビジョンの柱の一つであるウォークアブル化は、多方面に様々な価値をもたらす。各主体が本来持っている目的を踏まえた上で、ウォークアブルな空間づくりによるメリットを解釈し、多様な形で関与していく。
- ・まちの大動脈である大通りが居心地よく歩きたくなる空間に変貌していくことで、まちなか全体の連携を促す装置となる。

#### 一元化された質の高い情報発信

- ・日常的な情報共有で、まちなか全体でターゲットを合わせた企画・広報を展開。
- ・まちなかを使い倒してもらえー体系的な情報発信。

まちなかのメディア化

ローカルファースト運動の展開

#### まちなかを使い倒す価値観で、まちを活かす

- ・水戸のまちなかを積極的に使い倒し、まちを楽しみながら、育てていく。
- ・使い倒す姿がまちへの関心を引き、育ったまちが、また多くの人を楽しませる。
- ・それぞれの個性を活かした連携で、地域経済の循環を生み、もっと魅力的に。

Illustrator:坂紗希

## 「水戸まちなかデザイン会議」開催概要(2026年1月~3月)

水戸まちなかデザイン会議では、水戸のまちなかの未来を、「自分ごと」として考え、まちなかの再生に向けたアイデアの共有や実験企画の検討を重ねています。

1月と2月に開催したデザイン会議では、2026年に水戸のまちなかで何が出来るか自分ごとで考え、参加者によるディスカッションを行いました。

### 第43回 2026.1.25



参加者からは、まちなかチャレンジの紹介と研究報告をしていただきました。

### 第44回 2026.2.23



## 今後の取り組みについて

国道50号の活用に向けた調整を進めるとともに、学術機関との連携による研究を通じて先進的な取り組みを推進します。また、沿道民地と歩道空間の一体的な活用や、関係者間のネットワーク構築、まちなかチャレンジの継続・発展により、水戸のまちなかの魅力向上と連携促進を図ります。水戸のまちなかの未来ビジョンの実現に向けて、引き続き活動してまいりますので、ご協力・ご支援をよろしくお願いいたします!

また、「水戸まちなかデザイン会議」も引き続き開催していきます。活動の様子や今後の予定は、HPやSNSにて随時発信中です! 皆様のご参加お待ちしております!

2026.3.31 Vol.16  
発行:水戸のまちなか大通り等魅力向上検討協議会事務局  
水戸市桜川2-2-35 産業会館3階(水戸商工会議所内)  
mitonomachinaka@gmail.com  
編集:水戸のまちなか大通り等魅力向上検討協議会事務局  
(株式会社まちみとラボ)・TRIX MAG.編集部



まちみとラボが提案する  
水戸のキュレート・ポータルサイト  
「TRIX MAG [トリックスマガジン]」

「TRIX MAG [トリックスマガジン]」では、ピックアップイベントの紹介、今日明日・週末のイベントがピンポイントで検索できるイベントサーチ、水戸の観光案内情報など様々なコンテンツをご用意しています。ぜひ、ブックマークしてみてください。イベント情報もぜひお寄せください。

<https://www.trix-mag.com>

水戸のまちなかをもっと楽しむ

水戸のまちなかIMAがわかるフリーペーパー



<https://www.trix-mag.com>



TRIX MAG. paper はウェブサイトTRIX MAG. [トリックス マガジン]と連動して不定期発行するフリーペーパー。  
TRI=3、X=10 で310=水戸を表し、水戸芸術館でもタワーのモチーフになっている10個の三角形をあしらっています。  
アートや音楽、演劇、映画、ライフスタイルのカルチャーコラムを中心に、水戸のまちなかで行なわれる催しの情報を発信していきます。



## 茨城大学と水戸のまちなか大通り等魅力向上検討協議会の連携企画を開催 気候変動への適応の観点から水戸のまちなかの未来を展望

水戸のまちなか大通り等魅力向上検討協議会(以下、協議会)は、2026年3月28日に第6回水戸まちなかデザインシンポジウム「酷暑を乗り切るOne Action ~気候変動時代のまちなかでウォークアブルを考える~」を開催しました。

今回のシンポジウムは、茨城大学が実施する「茨城大学水戸市街地アウトリーチ週間『まちのイバダイ』」と連携し、近年は気候変動の影響により、まちなかの環境そのものが大きく変化しつつある状況から「気候変動への適応」という視点から、これからのまちなかのあり方を考える機会として開催しました。当日は、「水戸まちなかりビング作戦2025」の実施内容の報告に加え、小寺昭彦氏(茨城大学 地球・地

域環境共創機構(GLEC)より、気候変動に関する話題提供をいただきました。また、話題提供の合間にはワークショップを行い、参加者同士で意見を交わしながら、気候変動によって想定される課題や適応するためにまちなかで実践できるアイデアを出し合い議論を深めました。

また、これまでの活動を踏まえ、今年度は「連携ビジョン」をとりまとめました。

TRIXMAG本号では、本シンポジウムの概要をはじめ、「水戸まちなかりビング作戦2025」に関するアンケート結果や「連携ビジョン」の内容についてご紹介いたします。

HP・SNSで随時発信中  
「mitonomachinaka」で検索!

水戸のまちなか大通り等魅力向上検討協議会



# PROJECT REPORT 試行・実証実験「水戸まちなかりビング作戦2025」

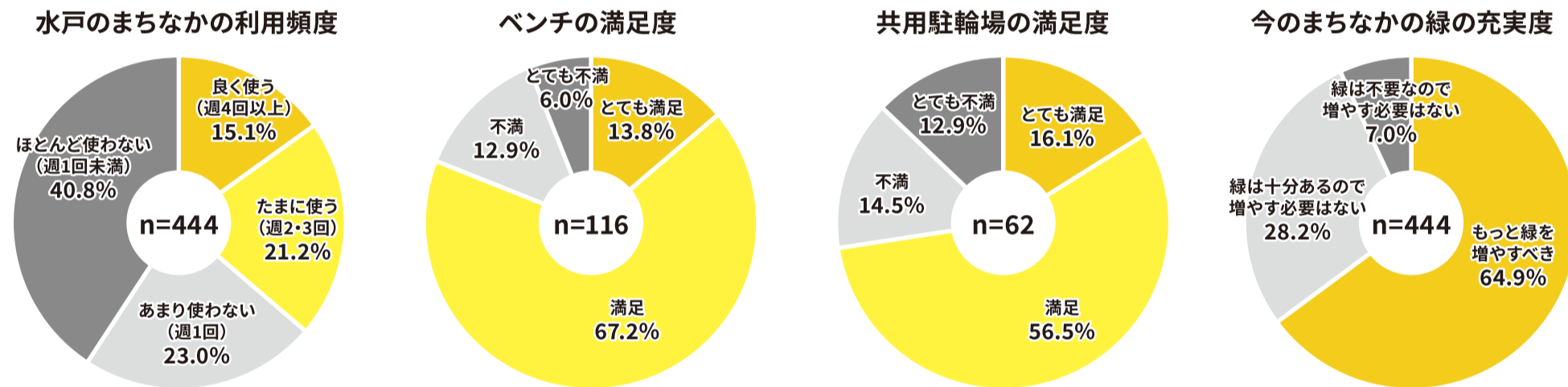
## 水戸まちなかりビング作戦2025の概要

<b>快適な居場所づくり</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>●大通りの歩道に植栽とベンチ、共用駐輪場を設置</li><li>●南町自由広場にテーブルセットを設置(※継続設置中)</li><li>●民地の空き地を活用したドッグランの設置・改良</li></ul>
<b>まちなか情報の発信</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>●大通りの歩道にデジタルサイネージを設置</li><li>●HPへのイベント情報掲載</li></ul>
<b>まちなかチャレンジ</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>●南町自由広場にて3つのチャレンジ企画を実現<ul style="list-style-type: none"><li>・あおぞらメルカート</li><li>→茨城ロポットのパブリックビューイングと同日開催</li></ul></li><li>●第2回まちなかでんしゃproject</li><li>●よむ・つなぐ・つながる市</li><li>→同日開催し、会場全体で一体感のある賑わいを創出</li></ul>
<b>未来ビジョンの共有</b>	<ul style="list-style-type: none"><li>●ロゴ制作・活用、グッズ展開</li><li>●実験エリア、路線バス等へのポスター提示</li><li>●大通りの車道に横断幕の設置(茨城ロポットとの連携)</li><li>●SNS投稿キャンペーンの開催</li></ul>

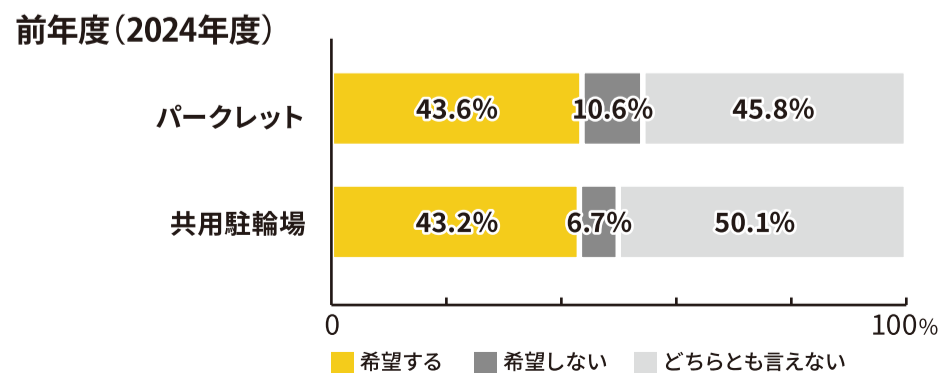
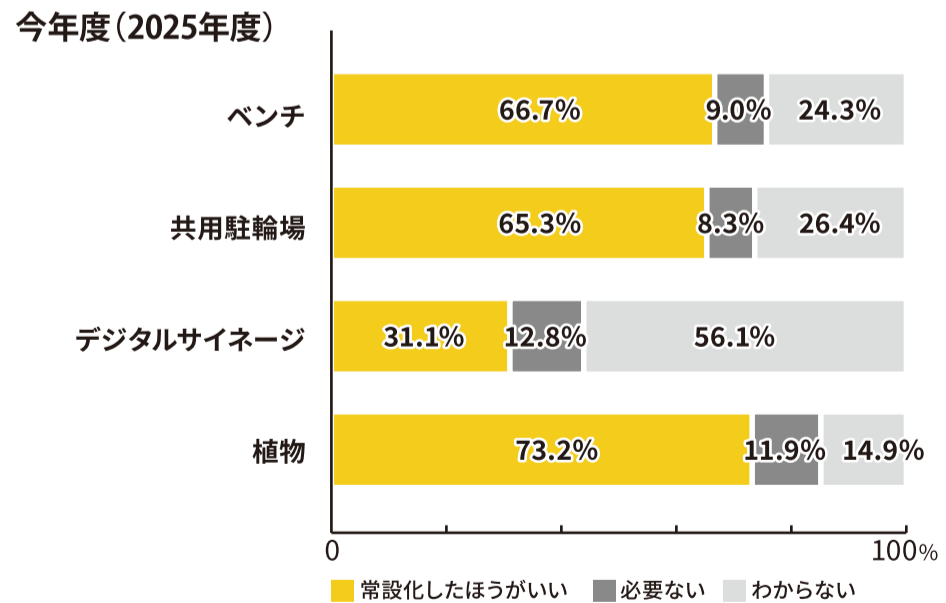


## 水戸まちなかりビング作戦2025に関するWEBアンケート

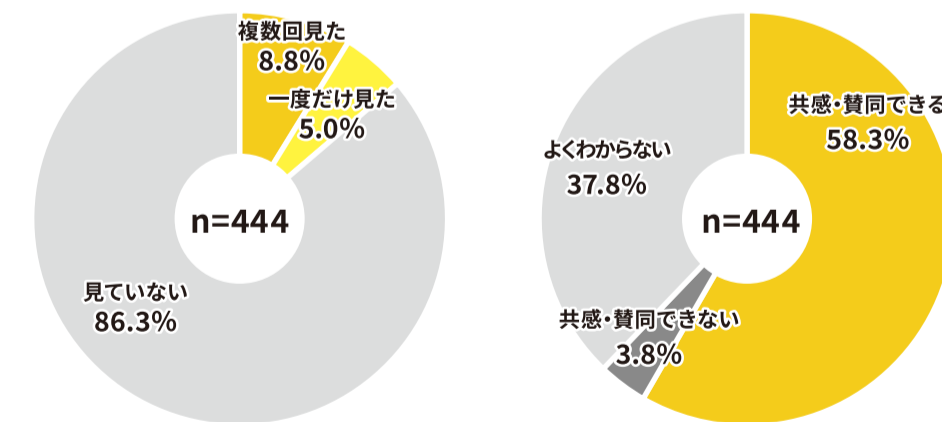
回答期間: 2025年10月~2025年12月 回答数: 444件



### 大通りの歩道への設置物の継続・常設化に対する意向



### デジタルサイネージの認知度



## まとめ

- ・通勤・通学・居住先との行き来を除いたまちなかの利用頻度は、週1回未満が約4割と最も多く、日常的な利用は限定的な状況にある。
- ・大通りの歩道に設置したベンチと共用駐輪場は、いずれも半数以上が満足と回答しており、常設化の意向も前年度より高まっている。
- ・まちなかの緑は半数以上が増加や常設化を希望しており、需要が高い。
- ・取り組みへの共感度は約6割と高い一方で、「よくわからない」も約4割あり、内容や発信の仕方に課題がある。

# PROJECT REPORT 「第6回水戸まちなかデザインシンポジウム」

## 第6回水戸まちなかデザインシンポジウムの概要

今回のシンポジウムは、茨城大学の学生・教職員と水戸市街地の施設・店舗が連携して実施するアウトリーチ週間「まちのイバダイ」と協議会との連携企画として、「酷暑を乗り切るOne Action～気候変動時代のまちなかでウォークブルを考える～」をテーマに開催しました。

近年、気候変動により夏の暑さは一層厳しさを増している状況であることから、一人ひとりが実践できる適応策を考えるとともに、路面温度の上昇やアーケード撤去などの制約がある中で、来街者を含む利用者の行動変容を促しながら、居心地よく歩きたいまちなかのあり方を検討しました。

当日は、「水戸まちなかりビング作戦2025」の実施報告に加え、茨城大学地球・地域環境共創機構(GLEC)の小寺氏より、気候変動の影響と適応に関する知見が共有されました。その後、水戸のまちなかにおける具体的な適応策について、ワークショップを行いました。

まちのイバダイ2026 × 水戸まちなかデザインシンポジウム 連携企画  
「酷暑を乗り切るOne Action～気候変動時代のまちなかでウォークブルを考える～」  
■3月28日(土) 茨城県水戸生涯学習センター 大講座室  
■実施報告「水戸まちなかりビング作戦2025」  
大森 賢人 (水戸のまちなか大通り等魅力向上検討協議会 事務局)  
話題提供「どこまで暑くなるのかー影響予測と適応のアイデア」  
小寺 昭彦 (茨城大学 地球・地域環境共創機構(GLEC))



## 話題提供「どこまで暑くなるのかー影響予測と適応のアイデア」

小寺 昭彦氏 (茨城大学 地球・地域環境共創機構(GLEC))



前半では、水戸における気候変動の実態について、江戸時代の気象記録も交えながら解説が行われました。

後半では、気候変動への適応策について、各地の事例を交えて紹介されました。

過去の記録からも暑さの存在は確認される一方、近年は明確な気温上昇が見られ、直近100年間で夏の最高気温は約2.7℃上昇しています。また、猛暑日や熱帯夜の増加に加え、短時間豪雨や無降雨日の増加など降雨の両極端化も進んでおり、その背景には地球温暖化とヒートアイランド現象があります。将来、温室効果ガス排出量の違いにより上昇幅は変わるものの、対策を講じなければ100年後には水戸でも最大4℃程度の上昇が予測されています。これらを踏まえ、まちなかはこれまで以上に歩きにくい環境となることが懸念され、水害リスクの増大も含め、気候変動を前提としたまちづくりが求められています。

気候変動の適応策はまちなかの魅力向上や暮らしやすさと一体的に考える視点が重要であり、快適にまちを歩ける環境づくりを軸に、にぎわいや経済の活性化にもつなげていく「シナジー」の考え方があります。また、近年増加している熱中症については、発生要因や注意点を踏まえ、WBGTなどの指標を活用した行動判断が求められています。具体的な適応策としては、日傘の活用やクーリングシェルターの設置など、身近で効果的な取り組みがあります。さらに、海外の都市事例や国内の新たなライフスタイルも参考に、暑い時間帯を避けて夜間に活動するなど、時間や行動のあり方を見直すことが有効であり、人の行動変容による対応が重要です。

## ワークショップ

前半のディスカッションでは、気候変動によってまちなかに生じる課題をテーマに、このまま気温の上昇や短時間豪雨、無降雨日の増加といった変化が進んだとき、水戸のまちなかにどのような未来が訪れるのかについて意見を交わしました。

後半のディスカッションでは、まちなかにおける適応策をテーマに、今後の気候変動を前提とした中で、水戸のまちなかで実践可能な対応やアクションについて、具体的なアイデアを出し合いました。

アイデアとしては、特に「水」と「日陰」の活用に関する意見が多く見られました。具体的には、打ち水や水遊び空間の創出など、水によって涼しさを生み出す取り組みや、日傘の活用、クーリングシェルターや無料給水所の設置などが提案されました。また、ベンチへの日よけの設置など、既存の空間に機能を付加し、誰もが利用しやすい滞在環境を整えるアイデアも挙げられました。さらに、イベントを朝や夜に実施することや、活動時間をシフトする提案、イベントを通じて日傘の利用機会を広げる取り組みも挙げられ、人の行動変容による適応の可能性が共有されました。



## 講評 金利昭会長 (水戸のまちなか大通り等魅力向上検討協議会)

“協議会はこれまで、未来ビジョンを策定し、ウォークブルやグリーンスローモビリティなどの社会実験を実施してきた。それらを定着させるには、皆で声を上げ、関係者に発信していく必要があり、昨年度からは「連携」に力を入れてきた。そうした中で、今回、茨城大学との連携が図れたことは非常に大きい。これまでは個人レベルでの連携が中心だったが、組織としての連携につながったことを踏まえ、今後さらに発展させていくことを期待したい。”

まちなかの気候変動対策を考える上では、「適応」だけでなく「緩和」という観点から、3つの側面もぜひ考えていただきたい。1つ目は、都市構造や移動など交通レベルで捉え、都市をコンパクトにし、脱クルマを進めていくこと。2つ目は、街区や建築物のレベルで、建築から廃棄までを含めてコントロールし、脱炭素を進めることや駐車場の集約化などである。3つ目はグリーンの観点であり、水戸だけでなく日本全体で遅れている分野であるため、積極的に取り組む必要がある。

また、最近では石油価格の高騰を補助金で抑える動きがあるが、一方で、ガソリンが高くなれば無駄な車の利用は減っていくのではないかと考えられる。特に水戸では、通勤・通学における自動車利用の割合が非常に高い。こうした状況を踏まえると、車が本来不要な場面での脱クルマを進めるためには、皆さんがワークショップで話してくれたように、自動車空間の一部を歩行者や自転車に振り向けることや、ウォータースポットやグリーンの導入、さらには公共交通の利用促進などに取り組み、本来補助金もこのように使うべきではないだろうか。”

